

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 10 日現在

機関番号：12501

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21730614

研究課題名（和文） 幼児の人間関係における同型的行為の役割
—発達的变化と協同性、規範意識に注目して—研究課題名（英文） The Function of Similar Behaviors among Young Children Relationships
—Developmental Change, Cooperation, Normative awareness—

研究代表者

砂上 史子（SUNAGAMI FUMIKO）

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：60333704

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、幼稚園での観察とそこで得た事例の詳細な分析から、幼児の人間関係における同型的行為の役割について検討した。その結果として（1）保育実践現場における観察と記録のあり方、（2）幼稚園における仲間関係の発達と身体を通してのかかわり、（3）幼稚園の葛藤場面における子どもが他者と同じ発話をするものの機能を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study explore the function of similar behaviors among young children using observations and detailed analyses. This study yield the following results; (1) the observation and record in early childhood education, (2) development of peer relationships and interactions by body movements in kindergarten, (3) similar utterances to the other in Preschool children's conflict.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：幼児教育，保育，人間関係，同型的行為，観察

1. 研究開始当初の背景

近年の我が国で深刻化しているいじめ、不登校、ひきこもり、少年による凶悪犯罪などの教育的課題の背景には、人とかかわる力の脆弱化が指摘されている。人とかかわる力は、生涯にわたる人間発達の根幹であり、その基

盤づくりは幼児教育にある。

幼稚園や保育所などの集団保育施設は、子どもたちが家庭から離れ、同年齢の子ども集団で生活し、人間関係の原体験の場であることから、そこでの人間関係にかかわる指導、援

助のあり方は非常に重要である。その前提となるのは、乳幼児期を通しての子ども同士の人間関係についての、年齢段階に応じた理解である。本研究では、乳幼児期の人とのかかわりが具体的な身体の動きの積み重ねであることを重視し（無藤，1997），幼児の具体的な身体の動きに注目する。「思いやり」などの人とかかわりに重要な心性も，子どもの具体的な行動すなわち，身体の動きを通して実践されるものである。従って，本研究は，保育（幼児教育）における人とかかわる力の育成を「身体」の側面からとらえるという新たな視点を保育実践にもたらし，深めるものである。

2. 研究の目的

本研究課題は，幼児の「同型的行為」に注目する。先行する多くの研究から，誕生以来，他者と同じ動きをするなどの「同型的行為」は，子どもが養育者や仲間などの他者とかかわる際の基本的な行為であることが指摘されている。また，子ども同士のやりとりは，身体の動きだけでなく，言葉や物（おもちゃ）も重要な媒介となっている。子ども同士のやりとりは，身体と言葉と物の絡み合いのなかで生じるものであり，それらの連関をとらえることで，子どもの人間関係の実態により迫ることができると思われる。

以上から，本研究では「同型的行為」を「身体の動き」「物」「言葉」の3つの視点からとらえ検討する。具体的な研究テーマは以下の通りである。

- ・3歳児から5歳児における同型的行為の発達の变化。
- ・仲間関係の成立における同じ物をもつことと，物をめぐる規範意識（分配・譲渡）の関連。
- ・協同場面にみられる同じ身体の動きや同じ言葉の繰り返しの意味。

3. 研究の方法

(1) 平成21年度：観察の実施

対象：幼稚園等の3歳，4歳，5歳児の遊び場面の観察を5回程度（1回2～3時間）行う。

方法：観察の記録は筆記記録，デジタルビデオカメラ等による記録を行う。

分析：観察記録から以下の事例を取り出す。

- ・子どもが他者と同じ動きをすること
- ・子どもが他者と同じ物を持つ・使うこと
- ・子どもが他者と同じ発話をする事

(2) 平成22年度以降：データ分析と論文化
平成21年度およびそれ以前に収集した事例をもとに，事例の分析と考察をおこない，学会発表や学会誌への投稿を行う。

4. 研究成果

本研究課題の主な研究成果を，以下に（1）～（3）に分けて述べる。

(1) 保育実践現場における観察と記録のあり方

本研究課題の研究手法である保育実践現場での観察と記録のあり方について，その特質と具体的な記録方法を考察した。

①保育における観察

保育実践における観察は，子どもの内面の理解に資するものでなくてはならない。子ども理解は，共感性を特徴とする「カウンセリング・マインド」を基盤とすることから，保育実践における観察は，「子どもを共感的に見る」，「かかわりながら見る」，「子どもを取り巻く関係を見る」ことが重要となる。

②保育実践の記録

保育記録は，保育の構想や自分の保育の枠組みの自覚化などによって保育の向上に資する。そのためには，保育記録には，「その場面を見ていない人が出来事の経過や子どもの内面がおおよそ理解できる程度の具体性」が求められる。また，記録から保育を見直す

機会としての保育カンファレンスが有効となる。

③保育記録の書き方

保育記録の書き方として、「空間経過記録」と呼ばれる様式を提案する。この様式の特徴は、「同じ空間の複数の子どもや保育者の動きを把握できる」、「時間の経過に沿った活動の展開を把握できる」、「図を盛り込むことで子どもや保育者の行動を詳しく理解できる」、「観察の感じたことを他の記述と区別して書ける」の3点である。

以上の①～③の保育実践における観察と記録に関する考察は、保育実践とそこでの子どもの発達を理解するための研究手法の提案として、関連する研究の発展に資するものである。これらの知見は、雑誌論文「幼稚園における観察と記録の重要性」（『初等教育資料』2010年1月号、文部科学省／東洋館出版社）および図書『最新保育講座③子ども理解と援助』（分担、ミネルヴァ書房）として発表した。

(2) 幼稚園における仲間関係の発達と身体を通してのかかわり

本研究課題以前の幼稚園観察および平成22年度に実施した観察の考察をふまえ、幼稚園の3年間における男児の仲間関係の発達について、教育課程との関連で考察を行った。

3年間の幼稚園生活を通しての発達の概要を図1に示す。

図1から、本研究課題の同型的行動は、特に3歳児の時期において仲間関係の形成に深くかかわっていると見える。3歳児の時期には、体の動きや表情を通してかかわることが多く、その際に同じ動きをするなどの同型的行動が複数の子どもの間でみられる。また、3歳児クラスの「集まり」では、並べた椅子の上を歩くなど、誰かが始めたことが他の子

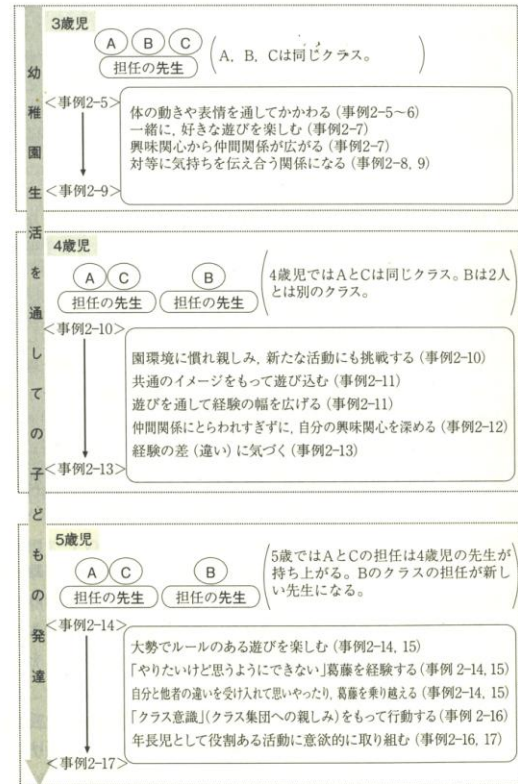


図1 幼稚園3年間における仲間関係の発達

もにも「伝染するように」広がっていく様子が見られ、他者と同じ動きをすることによって子ども同士は親しみを感じ、仲間意識そしてクラス意識へとつながっていく。

その後の4歳児、5歳児の時期には3歳児で育んだ仲間関係を基盤に、子どもたちは共通のイメージで遊び込むなどして経験の幅を広げ、葛藤も含めた多様な仲間とのかかわりを経験する。その過程で、クラス意識を持って役割のある活動に意欲的に取り組むなどの協同性が育まれる。

以上の知見は、幼稚園の教育課程全体を通した子どもの発達を、縦断的観察による事例から明らかにしたものであり、具体的な行動の積み重ねによる幼児の発達の理解に資するものである。これらの成果は、図書『幼児教育課程総論』（分担、樹村房）および雑誌論文「観察のまど 子どものにわ(3) 三歳児の『集まり』」（『幼児の教育』108巻第5号、

日本幼稚園協会／フレーベル館)として発表した。

(3) 幼稚園の葛藤場面における子どもが他者と 同じ発話をするものの機能

本研究課題で注目した幼児の同型的行動について、葛藤場面における「幼児が他者と同じ発話をするもの」に焦点を当て、その特徴について分析と考察を行った。

幼稚園の4歳児クラスでの子ども同士の葛藤場面(仲間入りの拒否、からかい)における「他者と同じ発話をするもの」の機能と特徴として、次の4点が指摘される。

①「他者と同じ発話」における相互行為の対象

葛藤は「〈仲間入り側〉と〈受け入れ側〉」や「〈からかう側〉と〈からかわれる側〉」など、欲求や意見が対立する子ども同士の相互行為としてとらえられる。しかし、対立する立場の子どもに向けられた発話は、自分と立場を同じくする他の子どもとの間で仲間意識や発話の楽しさを共有する発話としても機能している。

葛藤場面で他者と同じ発話をするものは、発話と一緒に遊んでいる仲間の発話の繰り返しである場合には、仲間関係を確認し、「仲間の子ども」と「仲間でない子ども」との境界を浮かび上がらせるものである。つまり、葛藤場面における相互行為の対象は、対立する立場の子どもであると同時に、自分が属する仲間集団の他の子どもでもある。このことは、他の子どもへの同調が、仲間関係を形成し維持するという、子どもの葛藤場面での子どもの行動を集団力学の観点から理解する視点をもたらす。

②発話と身体の一体性

他者と同じ発話をするものは、身体の様子や表情、声の調子、情動価(vitality affect)とい

った身体性を共有することでもある。言語獲得の発生的基盤および人生初期のコミュニケーションには身ぶりや身体的感応性が不可欠であることをふまえるならば、発話とは原初的に身体に根差したものであり、幼児期の子ども同士の相互行為においても、発話と身体が一体となって共鳴的・同調的に繰り返されることは自然なことであると。

その一方で、発話の繰り返しによる意味変容の事例の考察から、身体とは異なる、記号としての抽象性と反復しやすさという発話を持つ言葉としての特質が示唆される。

つまり、発話は身体性と一体となって子どもの間で共有されやすいことから、発話が出る楽しさや面白さは他の子どもに伝わりやすい。同時に、発話は記号であり反復しやすいため繰り返すなかで意味が変容し、当初は遊びではなかった発話が遊びになることもある。

③葛藤と遊びとの境界

発話が笑いを帯び、ふざけやからかいの要素を持つ事例や、当初はからかいとそれに対する抗議であった相互行為が、繰り返されるなかで、かけ合いのような「遊び」になる事例の考察から、幼児の相互行為における葛藤と遊びの境界の揺らぎが指摘できる。子どもは葛藤しながらもちょっとしたきっかけから遊び転じ、遊びながら葛藤すると。子どもにとっての遊びと葛藤の境界は、相互行為を通して揺れながら生成されるといえる。したがって、葛藤場面における子どもの感情は揺れを伴うもの、一様ではない多様で複雑なものとして理解することが必要となる。本研究課題で試みた身体性をも考慮した相互行為の記述はそのような理解の一助になると考えられる。

④保育者のかかわりと感情の言語化

子ども同士の葛藤に対して保育者は、揺れを

伴う子どもの感情を理解しながら、葛藤を通して子ども同士が互いの感情に気づき、適切なかかわり方を身につけられるように援助する必要がある。

葛藤場面における保育者のかかわりは、保育者自身はすでに知っている場合でも、葛藤の理由や経緯を子どもに尋ねることが多い。これは、大人の権威によってではなく子ども同士の交渉によって葛藤を解決できるようにする意図がある。このような保育者のかかわりは、子ども同士の会話を促し、会話を通して自分の感情を言語化し、他者の感情を理解することにつながる。他者の感情の理解は、規範意識の芽生えにもつながる。したがって、葛藤場面における保育者のかかわりは、子どもの感情の言語化をもたらす重要な役割を持つ。

以上、①～④の知見は、雑誌論文「幼稚園の葛藤場面における子どもの相互行為—子どもが他者と同じ発話をすることに注目して—」（子ども社会研究，第17号）として発表した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ①砂上史子. 2011. 幼稚園の葛藤場面における子どもの相互行為—子どもが他者と同じ発話をすることに注目して—. 子ども社会研究, 17, 23-36. 査読有.
- ②砂上史子. 2009. 観察のまど—子どもにわ(3)三歳児の「集まり」. 幼児の教育(日本幼稚園協会/フレーベル館), 108(5), 34-39. 査読無.
- ③砂上史子. 2009. 幼稚園における観察と記録の重要性—幼児の内面をとらえる視点と記述—. 初等教育資料(文部科学省/東洋館出版社), 2010年1月号(No.856), 78-81.

査読無.

〔学会発表〕（計1件）

- ①砂上史子. 「実践としての身体」を記述する研究のあり方について. 日本質的心理学会第8回大会(『質的心理学フォーラム』編集委員会企画シンポジウム『実践としての身体』指定討論). 2011年11月26日(安田女子大学).

〔図書〕（計2件）

- ①砂上史子. 樹村房. 幼児教育課程総論—豊かな保育実践を構想するために(担当部分: 2章「教育課程の基盤としての幼児の発達」). 2011. 27-54.
- ②砂上史子. ミネルヴァ書房. 最新保育講座—③子ども理解と援助(担当部分: 第4章「子ども理解を深める観察と記録」). 2011. 61-78.

6. 研究組織

(1)研究代表者

砂上 史子 (SUNAGAMI FUMIKO)

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号: 60333704